玉孫緒孫系譜

ホ 2
642
4

門木 加2 642 41

玉緒繰分 手巻

○れておその結びとある辞ハ。云云おホく八仰(おホ)せる辞云云

△炊おホく八と云へる詞に眼をつけて考ふべし、仰せるこゝ行ゝ

ざる辞のおその結びなるもいとゝそくなきにもあらず、然るに此

をバおその結びハ、必皆下知の詞と云ひそふ人の世小多きハいとん

つきなし、ある書に、五十音を八十行あゞ〜に、初躰用令助とまろるしこゝろえそ、

えけせてねへめえも函を令なろゝと云へるになぶらて(廿)韻の十音さ

なり下知の詞とそろう

るくいとく粗きとちく、

○考へ試むべし

△考ハ試うるべし」と有べきなり、引てろみる」と云詞の麻行中二段オノ

こゝろむ。」と活用らて、正き書どもの証、古く八未ゞ見當らず、やゝ多くて

の世のりのゝハをりゝくゝゆれど、それよゝゝハ云ゞゝからん、山口栞ふ例を引げ、活語指南ゝ
其活さま畧図の越き
委ゝく論ぜるゝなり、そもかゝる詞の活きのりの損ひハ鈴屋集・記傳等に
をゝゝをりゝくあなりいまんやてふをはふうゝきせめ奇ゝつゝの言る
ゝハ、寄ふも少ゝゝゞ、文ゝハいゝゞ夥きなり、
○又今の世ハ俗語のてふをたゝそも。あその結びだるゝけ。云云
△然処ハ、おのづゝゝ雅語の格ゝ矣ゝゝぬもおかゝし」と結に云て肖べ
ゝ皆ゝハ云難きを然処の云ひさまの如くゝそハ、初学思ひ入たゞ
者ゝらん、抑あその結びよ、俗語ならぬ分のやく古きにをゝ、然ゝそのの
かゝりのいゝゝぞも賞める多かるゝを然生の れく十丁 十一丁に即いつる証
観て熟く意を用ゐて古への正きを学ふへきゝを思ふべし、

○いひっきゝて云云
△云ひうけゝそ結べるあそ不凡そ二有、其一ハ云を二づゝ引て云ひう
くゝる、即爰に引る分ゞものの如ゝ、地名のいきゝ命の生きゝ、或ハ山と
止ゝ、或ハ又ゝゝ御津となどなり、さて二ゝ目ゝ彼の詞二をゝぬる
ゝハいゝゝで、只あその結びを要ゝ迄そ云ひそでを有、夫之集にま
ちつけてりゝゝも一あそゝくるさの波よう先ゝ人のたつらんゝゝみえ
ゝるなゞなり、
○あそ二つある分云云いゝゝ考づゝし
△仲文集ふ、貫ゝよりも賣ゝる こそ 罪、ハまけ なを うへ こそ 釜のそこ
一有 ハ毛 、底ゝ其許ゝを
うけたるたゝ、毛もこそ二あれど結びおのゝくゝるれバ二の

「こそ」を略みて一つに結へる例ハ日うらゞ、さて序に云さん、文章ホ
こその二つ有て其結ひハ一ハたゝみて結ぶるゝ見えゝる有、枕冊子
春七四丁　実白殿の云給やをゝ〳〵ハせ給ふ宮の大夫殿の清涼殿のまへホ
たゝせ給へれ給ふさぶらきなゝりとみるかゞゝおゝしあゆみ
出させ給へハふとゝおさせ給ひし「こそ」ちかいうぢかりの前の御行の
程おらんとゝ又ちゝ〳〵「こそ」いみしかるしう見ハ結ひハ一つのちうを
るを、上なるこそ二つゝもいづれも此ちうの結びへうらゞと云べく
もいゝぬさゆなりゞされど万六の長句なるを爰に出して「ゝうゝ
し」ゝかるゝ全く同じゝもまそれバこハりゝくハ「程ちうん」のんの
字、り、ハ免の字誤ならん、又ちうゝぞハ上なるこそやそ

の誤ならんゝ枕ホも思へゞ、り〳〵ハゞゝと云る上をゝちゝとんゝかふる
枕のゝも有るやかふゝくホ外にをゝ〳〵賞えぬゝ〳〵ひをるあゝ
なるをゝこの序に爰ゝ云て畏き人の評めを期つ、源氏若紫古三十三うへ
ゝそゝちゝ有〳〵源氏の君こそおもゝ〳〵さきれなどこのもぬゝこのゝふを
云云と有然も考べし、ゝり分ゝ云ゝちゝねゝついてゝ云爰ゝ引る天系や」のうゝえ
ホ二句の山を枕冊句のも然をゝ作るゝちうふぞゝ終
○ちうをゝ「枕」ハ云云されバ「枕」の下へうゝりてといふ云を加へて
又ゝ也。ゝのちゝ〳〵ゝ形ゝ。
△此ちうをゝ「枕」文章ゝも有、源氏帚木湖四十二などゝくうゝ〳〵きりのホ
〳〵もおホてべきおホゝあきゝゝなるちうをゝ「枕」契りあるゝ（てイ）ハ思ひ路え
め　誠やもゝそのゝ下ゝ云脱しゝる事ホ行末を押料て敬むもこそ文章ゝも用ゝ例あゝり、
栄花石蔭りくてみゝゝ云ゝ悩ましゝうゝ云ゝ是ゝり重ゝ也ゝ陰ホやゝもこそあれゝ云」など、

○玉のをゝ分

○二ハ「さぞ」とおしもうるを

△爰ニ挙ゝる五首の中、金四の、「おとろりやかゝ」ゆめ小ゆふなく
きゝ次「さこそ」もかゝ詠人さゆ〳〵ゆ、是ハ次なる千六「いゐ」のまゝふ
うをひろゆゆこゆうん「さこそ」嵐ゆおとのかゝ〳〵ゆ、「新ハ」なきゆ
とゆ面影をのこ身てそく「さこそ」ゆ人ゆ恋〳〵かゝ〳〵ゆ」なゝ云
へるゝハ、ふゝこゝれハやそのやうかをりてきこゆる様なり、その故ハ、
「さこそ」と云ひゝる末を、「らめ」なゝ云へるハけふ推ゝハうゝるときこ
ゆれ、凡て悔の字に賞る詞ゝ「これハ已然云ゆる也」つゝゆを「これハ已然云ゆる也」といへるハそれとは
異なゝ、結べバさよく同ゆるなり、然ゆども又よく思ふにまゝでにゆる詞なが
ら、「ふこそ」その結びとなるハ推し八りゝるゝてゝとなれるゆゆゆ

るゝハ、上三丁右ふあまゝゝ其例のこゝゝる如くなれバ、「さこそ」云へる
末を已然言ゝて結べるゝ、その例ハ少なゝれど、猶推し量るゝゝと
なるも有ゝるへゝ、猶其例をこゝゝらバ補ひ註ゝてん、
○「おそ」とかゝてそゝ「ふ」結ぶ格ゝ。云云。さ格ゝ挙集よりえび
めて。云云。
△「挙集より」と有を、万挙集の頃ふ始まれるとく云傳語ゝ
ゝ勿也、万挙ふ入まるいゝふるき歌ふこゝえたるゝ云ふゝそ、この
辞いゝふるくゝよりゝ奇のこゝなゝも、文ふえゝるも久きゝゝあり、
清麿等波奉侍留奴止所念天己曽姓毛賜豆治給之可」これらなり、こゝハ続紀
三十の五丁を
る宣命なり、

○ましかと結ふ格

△此ましかハ、まく。まし。ましか。と活く一つの用言なり、さてそれまく。ハ連用言、まし。ハ連躰截断の二をかね、ましかハ已然言なりかこと和語説略図に照して知べし、二巻四十五丁に○三転の所といひて「あらまし」とかぬ辞といへるつゞへ「まし」と出せるハ宜からぬ由、彼処に云るごとし、

○後ハのみぞなくなしれ結ふと見しかども時ゝるを弁ふなりて[こそ]あに

△此後撰の歌、かし「ありてぞ。あし来」を字誤まれるとハ非るか、但是ハ此歌のうへのこの考なり、[こそ]と云ひて志と結ぶ例ハかくよりあきことにあらん、思ひまかふべからぬ次、とされに思ひしをさて後六帖をこれバたゞして志かりれ、たゞし後撰のうさにつきてかくは云のうなり、又さも志かと行るへき処を志かのみ云へる例も行るとを然らじと云ふハ行らじ、則ち秋九長歌の「あ」と[こそ]「え」明証なり、さて六帖の如、かと「誤」出てく[そこ][し]なりしを、後撰ニハこさと「誤」

て[こそ]来[し]と行しためて入られたるならんも、ハかり難かれど、後志かにもあらじ、後撰今の本の字誤なるべし、

○をと結ぶ格

△是ハこれをおに思ひけるやう、此処云ひたりしかど、抑千十一のうたに、「君に[こそ]云々志川くなれ」と云へきをたゞみて、さて、然る紙と云意をバ云ひそこしたるにて、誤りなる「志川くを。」の「を。」ハ上へ反りて、「とまれぬるかな」と云処へ連くなるべし、続古十のハ、「志ゞに[こそ]人のこゝろをうつろいぬ、然るを文に見せたる山ぶき」と云意なるを、「うつろふを」と見えこみし成べし、五社百首のハ「ある[こそ]みやこなる、もみるべかれ、然るを袖ぞ波こえてちかのしほ」と云意なるを、云をたゝみて「みるへきを」といへるなめり、されバうちまかせて「を」と結ふこ

云てハいゝどし、と思ふゝど、云ハ右のこゝゝゝても現ホをゝと云ふれど、
此処の如くいさゝでも云あらゞ上へに、此をハ皆ゆをの云のなゝゝゝぞ
知らるゝ、千載十一のを始め皆上へ反るゝ
のゝ云まゞき故、猶よゝ考べし、

○ホゝ強ぶ格

△是ハ、人ちもゝぞ「ゝそ」をゝんゝと思へ、為る「ホ」と云ひ、月をのゝ「ゝそ」
なが久しゝ、為る「ホ」と云へきを、「をらん」と思ふ「ホ」と云ひ、「なが久し
ホ」と云るなるべし、

○こゝまゝゝの「ホ」を力ゝりて云云

△下せ「ホ」、「右のたゞひの「ホ」ハ、ちかゝゝるて、つゆの「ホ」りゝにちゝゝちのり」と云
へるゝと合考べし、かの「人のきかく「ホ」などの「ホ」とこの「ゝそ」を結ぶ処ゝ

おりる「ホ」と、その意その勢たかひこゝろひ似ゝゝ、

○ゝゝゝ　ゝる格

△此も上に准知べし、さて此を「ゝいひ」「ホ」と云ひ「ゝゝ」と云ひて、下へ
さゝゝ云ひつゞけること、文まゝハいゝ多し、こゝなこゝろハ右のこゝゝ
ちそこゝるはよく似るなり、

△さてこのわゝゝへ、○ゝゝゝる格」と云ふ条を一つ補入るへき歟、然
思ふに、栄花物語日蔭蔓ホ、村上の先帝ゝゝちゝゝかの大将のいも
うゝの宣耀殿の女御のうみ給ひし八宮「こそ」ゝ在の志もりのゝい
みゝきためゝ「ホ」と云る処、ゝこのゝめ辞とも云ふまゞく、まゝ脱誤
なゞならんゝも思ふれど、かゝる一の格ゝきくなゝるれど、なほ

この格ものもハまぐさ[illegible]れとゝ[illegible]も有りげに思はる、

○ごとゝ又ごとゝ[illegible]る格

△此ごとゝハ[illegible]うもごとゝ[illegible]ごとハ[illegible]れごとゝ[illegible]てみべし、[illegible]伝[illegible]ある[illegible]

のもゝに[illegible]ゝそ[illegible]あゝれ、然もごとゝ[illegible]をわがもゝきごとゝ今ハれまん、[illegible]坂を

ゐづゝぢゝ[illegible]ゝそ[illegible]ゝ[illegible]ゝ、[illegible]れごとゝ[illegible]ろづゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝそ有る[illegible]ゝゝや

うにいづれもなぞゝ考ふべし、さて序に云ふん、此格五七の字

数さぐ[illegible]れる[illegible]のゝうゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ、文章にもなほさる

例ゐり、枕冊子春曙抄の[illegible]二十二丁かやうの事[illegible]ゝそかゝゝ[illegible]ゝきりの

うちふ入つへゝれどなれゝ[illegible]ゝそゝ[illegible]ゝ[illegible]ハいゝぐ[illegible]せん[illegible]ゝ[illegible]ゝ

るなどなり

○[illegible]そのてふを[illegible]ゝのもさる[illegible]

△後撰十六の[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]れてふゝ[illegible]ゝそ[illegible]ゝ[illegible]にのゝ[illegible]ん、然るふそのの

ゝのもふかゝるや人を思ふ[illegible]ん、新拾遺十七のハ、かりふ[illegible]ゝそ[illegible]ゝ

[illegible]むゝのゝ[illegible]れ、然るふそのおゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ人や[illegible]ふ

ん[illegible]ゝ云へるゝゝろなるを、[illegible]らも詞をたゝこゝみて云へるりのゝゝ

バよからんと思ふハなゝゝなる[illegible]ゝ、かゝゝに[illegible]ゝのゝ[illegible]

とハおもゝれぬなり、

○六帖[illegible]むゝといひて[illegible]

△てれハ[illegible]れゝ[illegible]を写ゝ語りて[illegible]れる[illegible]ゝせるならん[illegible]思へ

ど、[illegible]ゝに味ひられバ、さにてハ何ゝなゝあゝハゝにさこ[illegible]、

まハ[illegible]ゝ[illegible]れるりのなる[illegible]ゝ云ふゝて、彼をゝえのはゝゝ

みまくひけるよとうゝもゆるも」と云へるたぐひの変格にて、こゝにかくるゝハ物せしにてそ、狭いたぐふ云々　それとはこなるにあらぬや、

○蜻蛉日記　等代をよバふ山へのみのこ「ゆき」ゐなづつゝまるよもひなる一ハ

△つらゝ考るに、状ハこに自らなる一つの変格と云べし、状玉緒二

巻　九丁十丁　へ然云て出しそよん、七巻ふ、等禁素法中てふをさなる

つるゝ」とこそ挙さなれど、万葉十四の廿七ふ、たくふまそ白ちゝふ風

乃祢ちゝ　奥故不詳　どゝろおそきの「ゆつゝ」を「志」を「吉」を有あぐハ「ゆそ」

と云ひて「若」ゝ截るゝことバにそ結べるゝそ、それぞこの「ゆの子

「ゆ」と云ひて「なるべ」と云べく、つぐ一つの例ある古き証とる云ひ

つべう思もれぬかし、つねハそのやゐの結なる詞を、まれに、なと徒の活ゝまる

つねハなと徒のまなる截断云を、まれゝハそのやゐの活ひと

せる変格の例さてに、さに示せることなるゝハあその活び

もゝつゝふ笑るゝ変格ゐりと云んふなそふとゐゝん、

○栄花志のかゞそ　わゝ見ふ」ふ」云云

△状行のきての句ハ「神ふかゝもてゝ有」を写し「侵まるゝハあゝ

ざるゝこれハ上の「まつふまるゝ」の並ゝハおもれど、同一ことゝなるら何と徒の

ハいひゝゝれど、六帖の「ゆるゝこの

「ゆるゝハ等ゝあがゝうそおもれる、

○とゝハもゝべゝ云云

△とゝ　截断言を受る定例なれど、稀ゝハ変格と云べく連躰云を

受ゝる例も有、但し活語雑話四六の条ゝ云ゝゝハ冥ゝ〻ゝ〻事有て、

彼伊勢物語なるあ上とゝうべ云ゝゝ雲みゝゝり」の詞下ハ雑活ゝ則伊勢集異

本の書三　ゝ海ゝ等ゝゝ如ゝ見ゝゝある瀑式」と有ゝ色徒ゝふべき類のまゝゝも

同昏四編[ハ]条ハ諸平の云おこせ事を挙て怠まるゞ如〜但〜紫式部集
ゝ折柄を云云書きをつくうむさこと[illegible]云へる如
きも必〜も為[illegible]とていまれど此巻十七丁あり合考

○定まれる格ゝて切まさる語をつゞくると

△次丁に、○定まれる弦び辞の格を云云と有と、此条と此類こ
とにんをとめてゝべし、新もまれバこれを互ふいぶらしゞる人多う
めり、さて爰にまづ挙ゝる条に付て因こに云ん、「とおり〜どせ」のと
上の句につくべゝうゞるゝと、古今秋、「月くさしの弓なるあつへ月もく
れぬ。おりゐるふの」なと皆因係、万葉ハ殊に多ゝるを、おゝくハ
「ゆふと思ふと云詞につゞくるゝと見る、山家集月添ゆ多くなる
き月ぞくりぬるあるのハ〜〜とのこなれて、此類ハ稀なほの

六帖三ゐせき「大ゐ川せきのふるゞひ年ゆゝも秋忘られん。とやハ思
ひし」見もと思とハ云ひ下さぬなれど、やハを係て思と云云有、

○定まれる弦び辞の云云

△二光のゝり分ゝも云し如く、彼「みゝの系ゝきて云云」の才四句もい
づれ云〜。[E]・の日例なり、かの句「つきとて」と有こと誰も知
まるゝとなるを「つゝ」とて書るゝの有とされに二光十三丁の係分
の細註に云へるゞ如〜、この弦本ハ実にゝゞ〜筆字のあやまりおゝせるのゝそゝさる
一本のある本をもてこハ[illegible]ゝらんこゝ、なをもちその図絵の末
の光弦せる処ゝて明なれバゝく云べくもゝ〜ぬどゝれもゝ顔ゝ思ふにすと
見。とゝけるゝかもゝりげゝ思ゝたるくにゝよりて類ハ多れど影近云ひ云なり、さて此
「定まれる辞の格をゝゐが〜て」と云へるに似てさまハゝ〜ぬあり、後撰
雑二「あゝれてふるゝかなゞくさむ空のゝをなどゝゝなる。」といひてすぐ

○玉のをゝり分　○旅九

らん」は意六、「夢の命いつゝもちゝぬ世ろ」などゝつゝしと思ひおうろ」、是らハ之と云ふハ定例の截断云を云へるうて、などの結びハ未なるらん」ろく」なり、たゞなどゝ云へるハもゝ〳〵でなどゝ云ふもゝ〳〵じゝまバ殊ホその示ハ連躰言「ゝ」ぎ「ゝ」ぎ等なるべきなれど、これらハ右ホ云如く、などゝ云ふ照應なるぞかし、なほ活語餘論の八巻ユ云る事どゝをも考へ見べし

○右の事、とゝもハ、上ユぞ「や」かなどの辞あまた。云云

△などゝ」と云へるユハのをこめゝるこゝや、殊定まれる結ひ辞の格を含めて」と云へるハ、のユハ殊ユ多し、そものハぞや」ゝよりハやく理く、はを這に近ゝるゝ、一巻四十三又三巻廿三ゝり分に云へる趣き合せ考ふべし、今こゝに、又芳家万葉ホ巻に、山陰のあなきゝそゝ波もこゝ云ハ、上ユのゝいひてなきゝといへる結びの格ゝみひさもどゝと少ゝりてきゝゝ耳にさハりて、なゝ」といふん方まさもゝり」ゝ云へる、志ゝ耳にゝゝるめ侍ハ、即ちのハはもに近きゝ友なり、志ゝれゝゝもゝ〳〵のハぞや」ホ類へゝ辞なれバ、ぞや」のホ末の結、ゝ類同せるもん往多ゝゝゝふ、その定格をたゞへて、のみゝるめかるゝゝぞゝゝふこれゝ。「と」きく」いゝくまゝゝおゝりハゝつ。「と」人とハゝ」もゝの如くに、ホをのゝ云ひて末をきゝゝく詞ホて結び、それをゝゝ受ゝゝ受ゝゝも、そのぞや」ホの末をきゝゝく詞ゝて結び、それをゝゝ受ゝゝるゝりハいとゝ多ゝゝるなゝり、「秋風のふきぬと」ゝく」ぞいでゝゝゝ永唱

○玉のをろ分　○橘十

のみこそ意しかりけ躬恒集、皆上ホの乃辞にれども、その結辞の格をたゞへてとゝ文ゝうゝ云べきなゝだや、

○そゝの言葉（古くるとゝ）ゆく（とゝ云云）

△こゝ今の世の人のよくつゝひ慣るゝとなゝ、そゝの矢別殊ホよく見ふべし、秋の花ゑまかつゝく詞書して、紅（とく）（ゝ）みるゞもあゝぬ妹のゝハ西きもやらもゞくまるゝもゝ伊勢集、されもゆくゝて来ゝゝて、往（ユク）与還（クト）ハ行らゞ、源氏関屋ホ、やくゝくゝ出きゝめるゝき懐をやゝぬしあゝと人ハゝるらん」ゝ者も用ひ、是を源氏君ゝ空蟬ゝの往与（ゾクトー）来なゝゝある註ハ、与字の意なるゝハ必連語を文る字のゝゝに心つゝねバなるべし、与字のゝゝろ

のなゝバくるゝゝと者べきなゝ、ゝゝの意のゝ詞をへゞてゝつゞけなるゝゝ、万十四六妹が毛も解く登結毛あ立田山今ゝそもみぢもめたるゝ、ゝハゝくゝゝもみぢもゞむの意なるゝ、ゝゝを考ふゞゝ、序にいゝん、ゝ二つ者て下に文る延ゝ言のゝなるゝゝ、文章ゝハ、古今序の、ゝの云たゝゝゝ思ふゝゝ今も云ゝ伝ゝれゝゝて延喜云云ゝ者て、伝られゝゝゝつゝるゞゝゝゝゝゝゝゝらでも、ゞなゞも、凡て上ホ二つ者を下に一つホ文る文法のゝゝ、古今集新釋一巻に審らなゝ、又万九六葦屋之宇奈比處女之奥擽乎往来（ユキクトミトバ）跡見者哭耳之所泣、ゝハ往くゝゝて来ゝゝ、ゝゝ二ゞび三へるゝゝろなゝるを、ゝきくゝ」ゝとあゝ、安もつまりハゝゝのゝゝなゝ、

○玉のをくり分

○ことゝ此字のことゝ云云　ことゝを畧きて「ことゝ」いへるハいとゝいやしげまこと少ホイ〳〵云い好ましからぬ辭ゆゑなり、

△此雖字の意のことゝ　ことゝのこいへる例、やゝ古くもこえゝることゝまて、あるがちにいやしきこえどもひられバ、さのみなぐるしとハ覺えぬも心〳〵なめり、其古きゝ云ハ日本紀す三さてらがくに

しきの心もをときさゝてあまくハ泥受迹たゞ心とよのミ、色も

數多ハ寐むぞとゝ」の意なめり、万葉十一六獨寢等茭杯目ハ方あやむしろ云云、同六九璞之年者竟杯數白之袖易子少忘而念哉、この旁がるハ仙覺本のまゝなり、之を此まゝ、まてこれバ、竟の訓樣にしく、これハクレヌトと訓むべくさそこの杯ハいまゆるとををとゝめいつるなりと云べきまも似ろう、ホをぜられなかよミかへて、油易子少ハソデカヘレコラと〳〵、竟杯をクルヽドとよむべしとそ思ふ杯ハ盃より洪音字故ふれを清音のとにつのへる、少く、多くハどに用ゐられバ、その例ふかなふもよけれバ之バクルヽトのまゝハよろしく、されバクレタトとよみてこゝをを右獨寢等叫等と同じことゝハ又るべ〳〵ざるなり、又古今　寂蓮筆江アヤ屋代氏所藏一本に「ねぞハうとゝ花とみま

一や」とみえたる等も、一ゞむきに脫誤とのミハ云まゞきゝ方

塗の「ぞとりぬと」、日本紀の「まゝハ孫ぞと」などに例知まるにと云んも不可ラさらん欤、さて又とゝにものそひてゝ云へるにをゝめるを

○古ゝ　ことを畧きてゝいつるハあゝかさへし、

△古今集コハ人ものおりひやなぞと」とゝれど、ハ、後拾の云云

とふと覺えたがへてゝや、又ハ古今集に吳本有てゝや、そハとま

も此「なぞと」のゝ助辭とまるゝ、古くハ頭注あゝうより打聽ゝ

ども然ることなれど、此玉説と同作の遠統小哉ゝる横井千秋の

考云云云ゝてハ「なぞと」ハ例なゝれバ、とハをの誤なるべく、ぞハかゞ

ま火ゝこゝゝぬ呂ひのなぞとかゝ」などゝ例あれバとの意ゝそ別なり、

されどそれゝゝろ〳〵とハ思されぞ、その故ハ、まづその例ふせるふハ、
「おりひの」と云ひて、なぞもと云ひ、それ〳〵応〳〵て、「浪の川に浮て
もやらん」と云へるなれバ、り〳〵ようく測ひて定めるを、坏ふ一本
の才二句「あ〳〵ぬれりひを」とつゞけり、それまでハいよ〳〵なぞもぞ
やきなり、のよりハおもうるやと、又それよりおもきなぞもと
主りゝなる辞二つの「やなぞも」より「まよ〳〵のなき」といへるところへ
かゝまらんとハ、さる例ゝりやおがつうなし、されバこハ、そこに即ち「六
帖」ハなふぞとあそどりだなし」といへる、その方によりてなぞも
ハなふぞの誤字倒字とし、「や」ハ「なこぞ」と同ひ咎むる処とそきるらて
て、さるハ四字六字ふかゝ、「や」なぞ」てひ〳〵き「や」なぞ」とう

に苗まる歌と同例、なほいまゝ、後撰なる「ろ〳〵なき思ふ「や」なぞ」
とあ〳〵ゆづの孫こなくまぞこあハまそこひ〳〵き」と見えるも同し、
「何」ぞとなぞ」
なるハこゝにもれもち、「なぞと孫ふちくといふきゝれ定めり、その
言なゝバつのとなり」と云へるによれるこそ、そこハきこえたれど、
然るときハ後撰の歌のかゝに不審ゝり、古今の「ゝよ〳〵のなき」とゝるハ「思
れバこも　ふよ〳〵のろのをきしむまそ〳〵
なるまんど、「ゝ〳〵ゝ」の孫ふちくまそふちまぞこひ「〳〵き」のかゝり処も、
二字十六ふいまゝ「巻十さび」「なき」の数ひこ〳〵そ　てこをは不調奇〳〵とゝふべ〳〵やと云
まんふ、げふこハいぶり〳〵、これを不調とハせどとなゝバ、他〳〵き事ゝ
「なぞ」などやうの餘情をのこれとそ、そびと続く詞こそ「なき」と云ふて、

截るゝ語〜て「ゑび〜も」と極まハいとぎり〜しがま後なりとも云ふへきゝ、めとよう「ゑび〜も」と極に云ひてハ、一首のおもむきゝろゝくなるとハ誰も知べし、かゝ云ふハ後撰ホゝろゝれる傍の歌めなり、かゝくにてこゝに出せる古今のハ、初句「人ゝもめ」にて、二句のなぞと・ハりとゝ「ホぞとゝにて」や の辭ハをゝきまりて止り、末の処ハ「ふよ〜」のなゝき・と本末結べるなりと云んぞよろ〜かるべき、さてハ○一つの「と」てこゝに出せハ、さゝ次の二首ゝてもけるへき歌、

○とがきつる方をたゝ〜まぢゝろぶ山本ゝちてのそのちり とまぐふホ

△芝ハちりとちりまぐふ」と云意と変ゆるを、次に引る貫之集乃ホ

「と呂ふてゝろゝをあき秋ちゝ〜むちる」「ゝ」まぐふホさハるちりゝ定

としいへる と ハ聊異なるやうなり、ちるハ截断言なれバ「ちるとまぐふホハ」れバ「ちりとまぐふホハ」ちりまぐふのてゝろならん、ちまバて「ゝ」なるべく思ゝるゝを、ちりハ連用云ゝ

さて又歌仙家集二 家持 廿二丁 ホ、又聊異ゝて此類の「と」有、次に云べ〜、

○とがきつる云云ちり と まぐふホ

△上に云へる如く、こハ「ちりと」ちりまぐふ」と云意ならんを、斯く詞をかさゝハせぞ「ら」、かさねいへると同く、そのゝをつよく云へるハ一つのとなり、このと右云やうに詞をかさゝ云間ホおゝるハ、ゝてそのことをつよく云へるなり、但し「ちゝ」云云ときハ、其かさね詞まづの一つハ躰ホなゝて云ひ、次の一つハ用ゝて云へるなれバ間に「と」りゝかくてたゞにかさゝいゝとハ其意き少〜同〜かゝぞ、抑間ホ「と」りゝ

なゝてとハ「ぬもゝて」などゝ云てとゝをべて黙しきそれを云ふなる
を、其習へいとゆるゝとゞ意多るハ「ゐちゝ」ゐちゝ「ゐ」きゝ。さゝ・ゐ
ど云へるこれあり、このゝハ。といへるも互ゝ似通ふめり、そハ「ゐちゝ」。
ゐつ「ゐ」きゝ。さき・などゝよハ「ゝ」べし、「ぬ」まゝふそぬまゝ「ゝ」ゐハかゝゝ「ゝ」
とやうにいへると「ゐ」ゐにしぬれ。ぬれぬる云の類ハうもゝるゞらだゝ
ちゝゝもゝ「ゐ」たゝん、伊勢集六と云へるとゝを合せ考るにいづれも「ぬ」も
たる」と云ふことゝをつよゝく云へるなり、さてこのゝをゐ口ゝへ出し、
又ゝを炊下二十二ゝ「わ」ゝへ出して、かれもこれも〇一つのゝ、〇一つのゝ、
と標して、示しつべきゝゝくゝれハゝふなり、狂よゝく考ふべし、夷之集十九
もたちゝゝ主にしるき名ゝハまゝなゝきもゝひゐなゝら兼、さて上の件ゝ引古今五、「ゝ」ゝくゝのゝの

ちりゝ。まゞゝ「ゝ」ハ今一説松枝ハ「て」をゝに誤まれるゝて「ちりて」
まゝ「ゝ」なりとゝこれハ「わゞ」やゝにきこゝえいそれゝるゝとなれゞゝた
今集をゝくゝハ此説用ゐそもゝるべし、されゞ「ちりゝ」ちりまゞゝ「ゝ」
とゝこれバ「ゐ」をゝくゝまゞ「ゝ」の処つよゝくなりて又よきやうゝも思
ゝるゝなり、おゝくにいゝ万二の四ゝ「鴨山の云云」不知等の等のさゞめをゝも考べし、
〇あゞゝ「ゐ」ゝ云云ちる「と」まかゝゝ
△上に云へる如く「ちりゝ」と「ちるゝ」と「ゐ」ゝ「ゐ」るを用に云へると雅ゝ
ゝて云へるとのけゞあゝるを、此用ゝて云へるゝ海ハ用ゝとゝるゞゝそ
ゝを云る詞がゝ「まゞ」ゝ「ゝ」。ゝふゝゝ云へるハ用語なるを、これをゞ又雅
云に云ひなゝて云ゝるゝり、そハ家持集二「あ」ゝろへゝとゝてそゝつ

まとしい河男のたつ」とまよび」に居も出られし、板本ハ「まつよ
ひ」いづれにても并にいへるなり考べし、絡ふは」と云へるに、絡ては」と云るも、語ハ同じくれとし活行の活用ハ此ニ四段の之、
○お對へていふと
△爰に「夏と秋と」など并云を受る例のこゝにあげて有、按ふに
りジハ截断云を受る定りと云ふハつれのことなるを、この與の字を
并及兼など こもあるる、の意のことハ、凡て連躰言を受る定りなり、拾遺なることこ
くれぬるとれそくなくと」の如き是なり、さて又こゝに引るちり
城ざふにの哥の如く」方六ことと云へる例もある中に、万五十五阿乎夜奈
義烏梅等能波奈乎をかさしのみての後ハちるともよし、ついてふ
云、柳に花とえとにつねにをさくいものことなれど、なきをとハいらぬに、催馬楽大路
に、於保知介曽比天乃保礼留安手也支加波名世云云伊末左可利奈利[例]とあく、拵ある

へし」と云へる如きハ「青柳と梅の花と」と云べきを斯云へるにて、殊
に珍くぞ聞えたる、
㊀さてまた考ふるにこの○ことよ十六丁のことたりに今一つ○又一つ
のこと」と出してよみんと思ハるくはり、そハ万二四十二丁、鴨山のいそねしま
けるわれをかも不知等妹之待乍あらん」此等もジハ、志てと云
ふむくへとぞきこゆる、此若狭の方云などにハ今もつねに云ふなりと
なりさされバ此万なるも不知而の意と云ことを疑ひやをさきたつ紀にて、
猶考るに、又万四初「よのあくるをそみおもひつ、寐宿難爾登ある
しつるくもなどある處の登の字を、之の誤り欺なども云ふめ
まど、さ云までもなく、登のままにて、こハ之の意のことなりと云ひ

て有べくおもはるるなり、上に云る「ちぐ」と「まうふ」を「ちうと」の誤とするもよきやうなれどそれと同の語勢とハなるもなをミよ此不知等妹

不知而の云るを「ちぐ〜ホと」と云へるも有を「之」をも御風李舊本と八「ちぐ〜ぢ等」と訓めり、万葉類句ヨリ入れ、

○おかよ我と切上も切る格乃辞云云

△此と殊ふよく意得並べきなり是につき猶こゝにさゞめりうせりと見しきことをはれそハ既く二首ハ丁ホ変格とて「ふる雨ぢみのしろごろを云云おどろうれ」ぬる」の類あまたを示せる如くにて此とと受るも、その「切る格乃辞」を「ぢと」「ぐく格の辞」にてはりあぐ〜とと受ること有とも云べき事と思也但中務集ある「あまりあてうひ有りとも思ひを恨てふるとと人やはるらん」の歌れふるとあどを彼玉緒二の十丁ヨリ源氏夕顔ある「いもせ山云云ふゝまとひるる」の

如くにぢと恒例の格ヨリつれる世と思ひしろどき結ヨリてハ非りるヨ代事既ヨ此巻八丁ホも云つれど尚云ん雑話四六条ヨ引出し古哥どものゆヨ中務集のハ右ヨ云へる如く也又伊勢物語の

を初め多くハ誤写とこゝきとも〜はれバかの「あつくろ〜」と

といひるんハかと語格ヨ精〜ぬ誤と謂べきヨそ有るる代外ヨ

ヨぢと連躰言をとと受る例ハはる也活語餘論八巻ヨ荘周が

夢ヨ胡蝶とありしといへるハ」と書る文のこと云へる條ヨ云

ふが如〜さて此ゆ〜へ、

△○一つの「と」と書て出すべき類ひヨハは〜ねく序にいそん本宗

の和讃ホ、ワレコレ故佛トアラハレテ」と云ふとの有状と文字ふと

これハかゝる用ひさまの例知きがゝきに似ゝきゝど、これも恒のこと
なり、然るにアラハレと云云を示現・化現などの様にゝるかゝ
に、とゞをゆえ易ゝゝゞゝなり、ゝハアラハレハ露顕と云人が
如し、古事記或ハ塵囊抄に微して辨ぜること、有人の記せゝ語辭林香
記の如し、（後云ハゞ故仏ナルト云ヿガ俗訳してゝゞよゝん、）

○やを免辭ホおくを

△此をゞゝゝるときハその末の例大方ハ略図ヿいゝゆる希求
の詞、又ハ將然云をゝゝるんヿていひゝゞむゝるぞまづハ自ゝの格
りなる此玉緒に引ゝるとゝをもれゝゝゝをあきゝゝをおりゝゝとゝを
ゝいゝんなど考ふべく、此外ヿもゝれてんと云ゝ、又けせてへめれ、

或ハ祢こ、又ゝこそこせの十二のうち欲ヿて應ぜる例ゝそおも
ゝる、さて休め辭なるて、勿誨ゝら、希求云ゝて應せるハゝゝに
もいゝゝゝ、んゝ應ぜるも亦聊歎息を含めり、ゝを延も下の意ゞ
やうのゝもよゝゝ古書どもを視てさゝるべし、抑下知希求ゝ
ゞ云ふべき詞ハまゞハ八衢上九左又十五右下五左ふみえたる如く、四段の
活きのけせてへめも、又加行奈行の変格の活のこ祢さて八一段中二段
下二段佐行変格、それらの活きの連用云に添へゝるより是なり、
ゝを外ヿハ総べての活きの連用云に、こそこせなどいひ添へゝるをも下
知希求と云ふべゝ、（枕冊ふくゝかりにつけこせゝるの義ヿをつぎそえてこそなどいゝるもゝるかくて此希求の詞、
ゝをべて　けせて祢へめも　こよこそらせ）ある中、いゝゆるやゝめ緒のを総受けたるゝ

いつも此十一の希求の詞と、彼んこの十二とを相結ぶてゝくそ思ハるゝ、
但し来往　これなどゝそ意じたるをおがえぬハさるりのゝそ四段の活き
詞等の中ゝも、せてめの三つなるハ今思ひ切らされど、此せてめ和
このゑつれ外ハ、行れもその例をでに明なり、其けへまよの四つハ、此
玉緒に出さる分ども、そ先ゝらべし、さやゝホをなき引ゝふをおりへ引
ゝんとをゝれ、ゝそ引ゝゝゝをゝよ。
今一つこそにて応じゝる例ハ、万葉五十二右　現ホえあふゝもなゝぬ
えゑのゝるのいめ仁越つきて見延許曽ゝ有など見なり、さて新
のをハむその末に希求語なりゝさゝりてゝれバ、此事次下十九右○ホゝをふ
をゝと出せる古六の分なども、たゞくゝの引ひゝくハ下ゝをおりゝ全く同例ゝ云ふべき歌
ゝゝ思ひ、ゝメドゝ思ふさゝハ行ゝさゝこなりてゝ
もゝと用ゐなるゝゝゝゝゝゝ至てまゝゝゝべし、ひて先ゝ大ゝゝハ此云如くなれ
どゝいゝゝゝ希ゝハんも下知のゝ世間ゝ詞どもんなきもゝり、万十二九ゝつ

せみの人めゝげくたぬゝゝの夜夢ゝ手次而所見欲ゝゝ見なりだゝゝ
是をかくゝまかゝゝと訓ハ、仙覚本に然るに从へるなれゝ、又思ふに、欲
ハむに当る正字なれバ、所見欲を三エナンゝ訓むへきゝもやらん、
さ訓ていよゝく能きこゆる分なるゝ然らバをの照応いとゆるんホ
てあなれバ此やをめれをハ、凡てけせて孫へめれこよこそこせんの十
二ゝて應ぞといよゝく限り云へくや、但しけんらんのんにてハ応
○ホゝをふを　難きなるよゝく弁ふべし、
△此條かゝ標目ハ一つゝて、その和ゝをふをホ三つゝり、抑ゝれき況
にゝゝハ此一條ハ除くゝきゝいゝゝとなゝらハ、こに出たる二首中、ま
づ其一つ、古六の、花乃いろゝ者不まゝ者ゝて」のハ、上にいとゆるやを

先辞にかくを」にて、「あひしくハ志さに[を]おもへ」と同例にかへのへ
にて応ぜるやすめのをならん、すべてやすめのをハ、必その下にんよ
けせて添へめきこそ こそ こせの辞ありて応ぜるをたりと思ひしく
ど今又考るにいはゆるやすめのをハ、てつくにとなどようつゞきる
大かたの定りなり、但しては明に多行下二段活の用言の例也、此外
にも今作れん哥に、すべて連用言をも此をを志そうけてよけん、さて其
てつゝにとををと交へる例ハ此巻十八丁なるどもをみて志るべし、
凡て動をとやうに辨言のさだかなるより、たゞに休めのをへつゞかる
例なきハ及バずとと云べきかとおもふがうへに、伊勢集なる哥、続後拾
にも出たる、彼「梅の花香にだにほへ春立て隆るあとまつきま

がふ光」と有ハ、已に上にも此古今なる「かをぞふになへ」のにまいとよ
うおぼえたり、されバ次に引る後拾の「雪を見て人をこられまし」かバと、
けふたぐへてにこをと云ハよききこづめなりけり、但し志かに
匂ふ中にて、古今のと後拾のとハ又聊のけぢめハあるとくハ猶おも
はるゝなり、其故ハ、後拾ハ「みやていづる云云雪を見て人[を]こられましかバ」、
是ハわとの古六の「か[を]ふに」のをと云バ、異なり、是ハ古今にも「人
をこられける」などをりくいへるめくにと云ふべき処のやうなれどに
といへると八差別ある処に用ふをなり、さハ何にまをふを」と一むきに
のこハ云ふまじく、こハ「を」といふへきに似て猶こききあるを」などいひさ
らんやよからん、かく此後拾のハ異なる趣き有、まさ古今のハたゞぺへかゝるやすめ
のことバとえれバ、別に○にまを「を」と一条にハせで八とも思ひしまれ

どよく思へ、
だにうらべ、さて、又按、万葉十一（廿八、廿九）よりあらべて君を来ませと
神のやしろ［を］祈ぬ日もなし」、此をなども尓に似たりとされば古今の
選のこゝろにハ又異なる歌きハなれど、これも尓にあらを」こハ非るなりと云ふ中へ入ハきこ
やさて又通ふと云べしとまでハ思定がたれど、こゝハ尓にてやよけ
人をこそやと思ひたゞよハるバうなるこゝろ、それをバ尓と云へ
バ俗なりをと云けバ雅なりとこゝろうる後もいめれど、是例集（六）
に「あひみてバちぐさむやとぞ思ひしを名ばかりにこそ恋しかりけ
る」と有歌を、後撰集（十）にハ「ちぐさむやとぞ思ひし尓」とあて入を
られしを思へバ、拾集ハちぐさで集より続せるこゝろなり、これ〳〵ハ大うた人の思ふ〳〵ふて、
をと云より尓と云方却りて雅びり、ミヤビ　正くもなるならん、かゝまぞ

尓とをと何をよろんと、今世こそ思ふこゝの有も男方を尓恋るなり、（万葉二七妹之家毛継而見麻思乎山跡有大島嶺爾家母有猿尾共初二）
を一云妹之當継而毛見武爾）とあるをも考へべし、古今集に「たむけこゝハつゝあめ
そらくもなるべきこゝろみちもこゝろ〳〵神やうへさん」とあるも、素性
集にハ、「きるべきを」とあり、それのこゝろ、それだけをと云べき
こゝろと思へられど、「きるべきこゝろ」と云ふこゝ優るゆゑ、拾集にハ
尓と有なるべく、上にいへる是別集なるを拾後撰に尓とせるも
をゝ〳〵此古今に倣へるゆゑ、又ハおのづゝ同じさゞめこゝろなりこゝの
こゝやかこゝに尓と云方の勝るも無るべしやと、

○古ム集の初出なるこゝをとゝ歌の有こを有

△上に云へる如く後拾の「人をこゝれまこゝろバ」と、古今の「かをゞ尓尓

本へ」とハ全く同きコトハあらねバ、こゝに狀をとゝ云へるこゝろ詞ハ後拾のをのゝへうけてゝべし、後拾の同きが古今集詞書にし云ふハ同じさうあて人をとかをけるがゆゑ、「春日山の木ともうゑて人をこうるとて」、さらのてくなるべし、こハ母に「君がうゑをこめよ」とゝ云れハ選別なり、留別ならハ人さうゑれ」と云ひて、をとハ云ふまじきなりと、那く留別と選別とを、をとかとのけぢめ有りとハ誰も大ゝ云うめり、云うれども然ひさぶるにハ云ひがゝれをり、其故ハまづ要之条に「ゑさゝこの位なる歌をきまゝとて本のへうつるにまへうたひゑるなる松と件とをのうて、一本コハ松件をえにとなりゝ」詞書して、この羽去明ゑに我ゑ立てやくに、てあれバこゝハ留別コトこそなれ、此日ゑ日ゑべ知ゑりとまゝもうゑるつる

松と件とゝ知ゑるに」と有コトて考ゑべし、松件ハのゝるなり、ゑれハ也くなり、去ゑるに「松と件とを」とハ云ひだゝ〜ぢ、さて万葉へ廻りて見るに、二十卷サ「たゝ〜ち孫の母手ゑるとてまことゑれ旅のゝりゑにやもく移んかも」、和の字コトとよめるに必ひてハ、こハ母子と云ゝ大云へゑれど、狂然ゑれゝ、ゝ有り、されど古今遠鏡小附註せる千秋の説の如く、ゑながちに和をゑれなゝとのゝも云べ〜ざるなり、その逐きハこまかに心を用ゐバおのづゝ明なるべゝ、留別ゑもをゝ必云ゑべきゝとゑ、選別もさやゝなり、されバその別ハ狂なきにゑ〜ぢゝ知べゝ、

○一のを

△古七ニ云ニ同十五云云、これもゑれさきコハ、古七なるハ、ゑゝら此年を

ろ和を」の意、十五の八「ふとをこひ渡る」と有白川かる処ゆて別ホ「つのを」と云べくもあらじ〻と思へハ是ろうき、元捕条、あふおと「を」志ぢ〻もふれハ白雪やのつりる思ひ玉きえぞ志ぬへき」公忠集「あふおと「を」よ〻につくへてふれ共のふ〻のかきなおさこひもそろ〻」蜻蛉日記巻末に、意を「たりひてあひてハ祢〻あふ〻ろ〻変「を」さめてハ悔〻かりけ」、これ〻何も指云事も物もなきを「を」り、さてハ別に○志て「のを」と云ハざるとて結ハざるあり、彼て又思に「塵」をたゝも志ぢとぞ思ふ古今美」とよめるなども、「塵をすゑ」とかゝるとゝんよりハ「ちりぢすゑ」と云ふ意ゝてを「ハ」ふとゝを。志う〻ゝ「ハ」かゝぢの小同〻とゝへき歟、さて歟辺りへ、又○一のを」

〻志て今一條加ふべき歟、又ハ○「よ〻ゝ」ふ「ゝ」ゝ仏ゝる「を」〻やうに出もよろんゝ〻ゝ志ふゝ〻ゝ〻ゝ、左の如し、

神代　やくもたつ出いつも八重垣つまこめふやへかきつくるそのやへかきを」

万十四八　れもりぢ小志それのゐ八隠られ〻天をそれて月夜清島」

万十二十八　あ〻川の山より出る月まの〻人ゝそいひていもまつられ乎」

後撰十一　これをみよ人もきさめぬ志もて絲を引出ぬるもがさを」

うゝやうに一條ゝ〻べてよろん、但〻万十二の八「それを妹行つ」後撰の八、「そがさをえよ」と上へ及ろふてつれのをなりとも思ハんゝ、ゝかゝハ「ゝ」ぢ〻、七巻廿八本「ゝ仏ゝる「を」」と一條を示ゝ、即これなれぐ、古風の歌〻ゝ〻ゝ〻ゝ出べし、万十ゝ志上へ及ろとも云ふまぢ〻くて、たゞ歟詠りの「やへかきを」とゝひたぐ

へるにも、さて又今一つ、◯一のをとちて彼風をいらみ流をよみ字
じのをを云ふべき歟、これらハ條に少く云にかよへる、流がまだ丸まとちてこべき類なるく文從ゆゑ山の風まえなりとよめる如く、此を八
なきのもあるのも〻えの
なり、かまうくふ一つ別なり、

㊀万十二十一我命之長欲家口偲手好為人手執許手」此手ハ又一別手、

◯[尓]

△つねの尓と云へる中にも、へと云もん手尓と云ハん手とたどく
志う思ゆるくなれバ、それハ一つ挙示さんぞ宜しかるべき、そはい
るにと云に古今十八ホ、学を拾て山[ホ]いる人山にても云くいつち行
らん」これを新恬集にてとれバ、学をうしと山に入なと」とかり、此
尓りじよ、古今に又、妙へ行厂ぞなくあるこ云
伝学のうきみんみえぬ

山路へいらんにハ云伝と云へるへと、互に通へるさまなれど、此と彼
ゑを並べてこれバ、皆けやしうなるくなるを味ひそるべし、件の
詞の證ま、古今にハ山のあうしのをとべつるもしの」と有、家集にハ、
学を背て山ちにまうる人につるもきと」とかり、此家集なるにめじ上
の一つハ山ちへ」と有べき様にも思ゆる侭其卅に、にとへとの論争
のかる、皆謂もてる事なれど、狩谷ハなほも有て、即此古今集なる、
山にいる人」のに家集の證書れ山ちにのになど能考べし、されど
次の詞にも依るべし、入ると云んにハ必しも云云へと云ましきにや、
狩氏論弁くるしくハ頭志とび」と名づるりのにいつり、え捕集十五世を拾て山へ、
人つきまし」や又古今何つらさに鳴てけらん時」何かしハいそ京へ告やらん」これら
の別き考ふべく、又月やあら」の八玉、古今にハ邪」へと
あらか伊せお説にはの外」と見ゆる等をも考べし、

○ののをとけよに近きに知 云云

△咲きかく［に］かとらぬ［に］などのに知ハ、俗云のノニと云に當るゝ、
云てよけん、憂あいづれまても歎息の意を含めりどつゝ味ふべし、
知と云次へ語訳せバソレニテアと云俗言をそへてミれバ意得易し、

○なくに

△こハ［ぬに］をのべたるものとのミ釈く人多かれど、さのミにハあらぬ
ぞ、北辺成章のあゆひ抄に、［ウカヤ］［又コト］［云云モセヌノニ］、様々讀訳せる
やうにとなしこくにいへる古今集の五首のなくにハ、いつれもぬとおもひ
て聞ゆれど、同集奇にも、ウカヤとおもてミるべき有、あるめれどもさて
まかしくれてなど、意をつけてミるべし、万十一 七丁「あさも子よ恋てた

へなみえんとミれハたえりくど不所寐（イネラレナクニ）」、見らぬになりとのことに云
おきがうし、活雑㊆の条に詳まれ

○なしに

△せ知に八凡てナシ然ルニテアと讀訳おきてミれバよく聞ゆるやうなり、
活語指南初巻 六丁 考合おべし、天徳哥合友草 忠見「あつ草の中をあ
けぼのきそけてうち人あしに志ろる世へふ」、見ら八件の読訳当らぬ
やうなれど、能ミれバ猶 前人あらバ志ろるも悪まうしさる方もあれど妻子きそけて侯て前人なし其まま思ふ意を 同意也、

○一つの知

△まどえぬ人［に］ちゝまくもをし」ハ、ノ夕メと訳おて、見ぬ人のあ
まちゝまくもをし」の意なりと云べし、たゞ夕メとのこと訳おそようし

もはら、万十五九丁「あをによしならのみやこにゆく人もがも草枕旅ゆくふねのとまりをつげん[尓]」、又「かへるさにいもにみせん[尓]わたつみのおきつしらなみ、よりひてゆかな」、是らの[尓]ハノ為と云てうべきにあらんや、又栄花歌合 恋 能因「黒髪のけもかはらぬ心にてまだ見ぬ人[尓]恋ぞそめつる」、この尓ハ、殊に右に云へる如く「人の為に」と云てハ聞えにくくぞおもはるる、

〇一つの尓、このはしりへ今一つ、〇一つの尓」と云て「ぬもにそめましし」など云へるを本にてよみし歌よし上十五丁〇一つの「に」の処に云へるが如し、「神無月しぐれハ紅葉もいろなれや時雨と共にぬるる尓こそふれ 順集」、「採むあとふるとをみる人の衣ぬるべき君なしなく

[尓]貫之集」、此らなりさてにと云ふにあへるやうなり、此「あゆふにはひきとさて」などいふにハそのことをつゝむ方なくとハ、又異なる心ばへうてをらんとすれ」などいへるも、大方同じきに似たるを〈花尓〉みて」とやうに云へる有、されバ尓ハ尓をうくるに似たる中にて、又二つの別もありとハ云なり、さて又今一つ、〇一つの尓、万葉三巻二十「今代にハ楽しくあらハ来ん世にハ虫に鳥にもわれハ成なん」尓ハ尓ハありたるにハならねども、を一つ云ひて二つの尓に及ぼせるなり、さて又一つ、〇於送とふうく尓抱えたりなどむとももぢ尓」これもかなりたる尓にハあらねど、云ひさしてのこる意を含めたるを、むねとの例とや云ふべからん、さて又一つ、

○「雲を花にみる」など云へるハ、とに似たるなり、此も云ひかりて
ゆけバうちわれるなりしかど、さてまた一つ、○万六十左 山高三白木綿
ハナニ。花落多藝追瀧之河内者雖見不飽香聞」同十一右 泊瀬女造木綿花
三吉野瀧乃水沫ミナワニ。サキニケラ開来受屋」是らハ「花の如」と云ひ、「水沫の如」と
云べき歟、「志らゆふ花の」とよめるのにとよめバ、例ののの如くののなり、されど古訓にニとよめるまゝにてのにのののいろると同く、ふるも如くふ乃
ふ有と云てよめる、同十一廿四又十二廿七に、朝影爾吾者成奴 衣云云ひさしくなれハ上一 児由恋に十二 是
らも「影の如く」なり、
○「流みのてハ」あと明るてあり
△是ハうごかぬてを云なるへし、かくて云云とのてハ、「つる」「つれ」
と活用するをなきなり、それをつねのてとせるもあり、次下○

てき云云と云へるハ、「捨て」「交て」などのてと同く、多行下二段の一乃
活語なり、此てハ「てし」がなど云もれ、その動ぬてハ然らざるもて
活雑三編廿六丁にすべててゝをむの四つの、うごくと動かぬとのを
いへる処をこそ明らむべし、
○「爾て」
△爰に出せる九首の「爾て」ハ、上にをと云て「爾て」と云へる、げに一つの
格と聞ゆるを、この「爾て」ハ皆辞語を受けるなり、もとハ用語にても
そを辞云ふもそれ受るなるを、「露語」よすがなかりけり「爾て」
ふじ語りをわの思ひ「爾て」などいれも「應にある」としを知るべし、
「爾て」「むかひのちぶさを」ふむしに「爾て」などく聞きまで暁るべし、さて此

廿四右

外に、「思ひ」「然りて」などをバ捨りしの用語のまゝにて、其を「にてと
いへる有、さて其にハ、ぬ、ぬる、ぬれと活く、彼（六巻五十丁につると並ぶぬるといへる是なり、）な
りにたりなど云へるにまでのつゞきなれるなり、さる例も云ひもて
ゆけバ一つにもおちぬべかれど、始よりけぢめなしとハ思ふまじき
なり、「思ふかくきこえにて」「何と思ひ入にて」など、文章にも少からず
るハ皆上にをとかゝることなくさてなれバ、いさゝかもまぎるゝことなかるべし
身の思ひにて」など、又をとかゝるのまハ異なれることあるし
とや云ふべからん、
〇でハ、ずしての清ばまりある辞なり、つゝのでありあるまじ
△上二十二右にて、清てのでと云へるハ、上に云へる如く動ぬてのて今ありにて

つゝのでと云ふハそれと、かくなりて、あすでを一つ別に云ふ故、それ
に對して自余のでをつねのでと云へるものゝこゝろ也、然も此書ハよく
考もバ好からぬ名けさまなり、濁らぬでハ動く動かぬ二つあれど、
濁もてるでハいづれもことごとく諸活用云の諸将云（但し略図ニ諸活用乃四十ありとあれる中、無字標せるより不字までの四と、将字に当る三と、あハせて七ツを除きて、有字仰せるより、其字かゝるまでの卅三、それも和行のあうゝうれみよの一を数へざる時ハ、凡て卅二の活用あるを、その卅二の活用云の、その将然云をいま概して諸将云とハ云ふなり、）を受る定格にて、これもしくずして
の約り、其ずハずぬねの用らき、そのしハ、せしすするすれの活き、
そのてハて、つ、つる、つれの活らき故に、でハいつにても用言へつゞく
云にて、え来しの活用語なりされバこの（ずしての約まりの）でハ上の清音の
ての如くに、恒のと云へバとて、別に動くと動かぬとあるにハ非る

なり、なでと云ふも、いと四るなふぬぬるぬを祢と活く詞乃將然言のなを受くるでこそ、さのこつなくぬでと云ふりのコハあらば、されバ「で」と標したる次コハ、○でハぞ〜てのはゞきりくるる辭こそ、すべてあゞ然らざる語（將然云のこなり五の段に）（てのつゞひなれの活なり）を受る定りなりその中にて去の將じくるなを文くるはゞ耳とあるやうなれバ異なる事なるゆゑ、その云禁ある例をつゞへおく」と標して云て次へ、（古上三）「入る矣加る」（云云）とやうに、次々（新十二の）「のゝはやく」（云云）「つゞひぬ」（云云）までを列したうんぞよろしくるべき、

○「海やく」（云云）金禁三「天の川かへさの舟に流うけでのり見づくハゞ」

袖もふだうり、けでもなでのをなを

△次上に云へる如く、湧るでハ、諸用語の諸將云くる定り無る加行下二段の活きのうけと云將然言を受てのてなり、然るゞ今一つなとれきてでと文くれハ云ひきたるべきを、五七の字数なるりの有くく「けでといへるにて、かくる例ハ狂多るべし、「ぶひにて」といはまホしきを「思ひて」と云てさておき、「忘れにつて」と云こなを「忘れづて」と云てやまんと全く同じことなり、又考るにこのこゝにて、たとへバ「忘れて」と云ても意たゝハぬコハあゝでも、又七句の字数をしぬ「ぢえ忘もなでと云てもときによりてハありぬへく、「ありハで」にてあゝきにハあらぬをも、考へこよりてハ「ありひなで」と云おくやうのこも、こゝよりぢふようてハなるべきに涉るなり、かにくこで

ハ必〜も將然云を受くるゝ〜こゝろえ、ぬハ去の將然云なるゝをよくこゝろ得へきなり、

○な

△此廿四丁左より廿五右うけて示せる八、皆歎息の辭ゝにて、この下九ゝに出る、上と同じ云なへなれど、よハきへて連躰云をうけ、たゝハをべて截斷言をうく、寄りきなを寄りきよと八云へく、寄りしなとハ云ふまゝ〜うなゝをうるゝよと八云れぬ、かなゝきよとハ云へく、かなゝきなとハ云まゝき類ひ、底く考へゝるべし、

ふよおりふなゝばなゝばよゝやうにいつれにもいをるゝハ其ふりゝおりなゝのゝより截るゝと連くゝとをかゝひたるかゝれゝまゝ、

かゝるゝに截斷言につく歎息の声ハなゝたゝひ連躰云ゝまゝぞのやなゝとに掛りて截まゝる、或ハ已然言ゝまゝおそにゝゝて斷ゞたるをゝり、此なゝそハるゝゝり、泳氏夕負、ゝゝゝとこそ見ひゝれなゝ、又紅葉賀小、ゝゝの試乐ハ青海波ゝ事皆つきぬなゝよく辨ふへきことそ、

○ハ截斷の標●ハ連躰の印ハ両用のしるし、猶下上のところ小云ふべし、

○勿れ云のなゝ

〈このなのゝハ、活語指南初卷三丁もよくゝへし、凡そ用ひる所二つゝ中ゝ、ゝゝハ「莫出そ」の類なるのゝ出きて、孫ぎりは衣いろふいつなゝ免の類のハ、ゝれゝるゝゝて省きて出さぬなめり、されゞ今其ゝをも初学の為に云ゝん、その勿莫ハ皆截斷云いづいぬくなゝを受ゝ例なり

り、俗云ニハ異なり、俗ニハ大氐畧必なる轉用示しの段を一段上り
て連用云をうけて、いづるを「いでる」解るを「ふれる」、又おつるを「
ちる」恨むを「恨こる」、又似るを「ふる」、みるを「ゑる」と云
ひ、或ハ一段下りて連躰云を交て、いづるを「いつる」、くるを「くる」
いぬるを「いぬる」、為つるを「為つる」、おつるを「おつる」
いなこまるひて諸ニ歳る、なとゝ云ふ、数本に
誤る、りしハ作者の叢心ようなるゝ、凡そ禁止辞の莫ハ作用云の限
りその自辨截断する云をうる定りなり、但し共勿のなハ形状云へ
ハ及ま、形状云まても〳〵又ひてをべて截断云をうるもハ歎息の
ななり、略必ずりしこのごとくせるた、のちに改正の図ニハ補入して、

○云のをそり分

とたゝしやのつゝまもなゝく出せり、さて件りの作用云截断をう処
を交るなを、今世も田舎人ハ四段の活き云のかぎりハ大〳〵古語の
ふりに云を、永ニてハこゝらしく〳〵甚いやしむるに非るをりハ、連用云
をうけて、或ハ汎、或ハやをそへて云ふ、ゆくなを「ゆきなを」いふなを
「いひなを」、〳〵云類、いと俗びにさとびゝり、さるハこゝに出せる「ふき
ちし」「ちし」そなど云ものゝとゝ心ゝろになり、かゝるゝをもつハで
にこゝろえ違てよけん、淡やゝの「なゐ」そと云へるハ、作用云形状云
〳〵もに、連用の処をなゝとゝ交て、次ふまゝ連用云しそ、そのなをうき
て、「ふきなちし」そ「拂ひなちそ」そ「ちそ」とやうに云なるを、そハ作用のゝ
ゝて形状云をハ、なゐくそ「なゐ」「くそ」とハいはゝ、形状言も①韻の

有ハ「なほ」とり「そ」と云ハれぬこハ非るなり、さて此「何なほ何」と云ハ皆「なほ」より句豆ーてよむべき多し、「あやを」と句りて、「なほ咲そ」と豆るべき類なり、是を初学或ハ辨へぞして、「いくなほ何」「ふきなほ云」と上へつけよむべきのと一つに云うらんハ非なり、さてこのなほ連用云の次へ「ふきおちしそいくぞ」「おるびそ」などゝ云ひも、又連躰云の次へ「まるおいゝひ」「そなとやうにも、まる辞ニハ「ふハな焼」「ふきちとじめ」「そとやうふ」も云へる例なり、

○拾十六　花の色々云々は「なほ」なふきそを云云これ〳〵ハなを云云。一つハ「ちまりて」なほいくぞ。

△拾遺の八「はなをふきそと」のをなにてやまり、元輔集の八「たちなほりそ」なりしを、是もなをなに写してやまれるなど

ならん、元輔集の古本校せるまも、印本の「ちなくようそ」くてるなに異なるこゝ云云ふぐ三句のきをくゝせる一本ありるよーのこゝ云云たりく

○夫木原仲正云云「日寂茎」云云

△「卯」「そやりそ」ハ、「卯」「なるやりそ」の誤、「卯」をたのこそ「ハ、「卯」をたのこそ」の字誤ぞらん、恐らくハ仲正寂茎の拾りしにてらゝじ、抑玉緒ハ、ゆゆるかしこきりのちりけ著書なれどさるかゝに却てたハやをげ古人を誤せるが、中〳〵なるひが論免となれることもまゝまどりて、彼「多ハ〳〵せど」をバ「〳〵まど」と写せるに从ひて、たちまちにさぶめ逆てる類ひのこゝもありり、此ハ六巻十八丁の繰分をこて知べし、繰分ハ波ノ巻廿丁立、「可」をだのたぶ「へそのへそ」などゝも、かの右二の「あや無莫咲（ナナサキ）そ」を、「なくと踊らせかきくんを、なくと写しひが

めたりん本もあるに類せるとなかるべしやハ、

○一つのみ

△此みハ玉霰にあるごとく、大かたハなきハ無きに うすさハあさふ

と志てだにこそあれバ、よく玄えらるゝやうなれど、へ、ゞなどハさ

のさもしてえがたく、又同じく志きの活き語の中ながらに、如き

と云ことハきこえたれど、などかも、活雑三編によくはしく論ぜる

をみて辨ふべし、

○後又 万十 天の川せゞ玉志らも浪ゐかきもどたゞ彼てきぬまゐまでし 之

△此奇れ[illegible]さハ、次上の歌をあつらし之、次下のちりぬべさなど

とハたがひて、苦しまん 苦しみ 苦しむ 苦しえ と活く語の方ふて

云へるなりとれもちる、二巻のくり分にも云へることども考べし、

○古 十三 あさ之てそ袖々ゑつらし先の左方一説して こも八浅き本を云云。但し源

氏葵巻に浅えこや云云

△爰の説ハいたれるとなり、されど古十三の、あさえてそハ於

浅き処にて、彼或本の志けみにおなる、のみと同じに、源氏ね情に

志もされるをこれバ、こハもとよりその方によるべき歟、さるハやが

て古今撰者の紀氏まゞてにさ思ひしにやと思ひてこともあ

きバなり、要之集がり くさの秋の田の本に出ぬもハうちむれて里

とに みよぞかぞぞ来よりるとえてたると皆ひ同じう聞きなさ

るゝなり、序に云ん、中務集に、ふての志けりをうけて鳴鹿ないりてなりの人るぬらん、此ハ志げみと有べう志き処なれど、かくいうるハ鶉吾を称ふ

「ものゝ」と云て、それを「うけて」と云へるものゝいへバ云まもをぐらめれ
どこの分ハ然ゝし、狂「ものゝ」みの字語りならん、おくに云んこと合考、

○雜歌ゝ云云又云云　云云

△此條ことゝによくよみ考え知べきことゝなり、次の六首五右ニ○場
川後百首に云云と云へる処と合せ考へべし、但しかの「うきぬ」「ぬ」ハ「うきみ」「ぬ」の字語ならんも八クりがさしがコクに味ふり
「ぬ」「ぬ」「ぬ」などを俗ニハ「あきつ」「ひつ」などやうに云へこハ古る
雅語ニハなきなり　玉緒六巻九丁　なる事の如く、なるを、今の世のあよこ文かきは、
狂男ひ語りてゝ「又せつ」「きうせつ」「小つ」「ゆるべつ」とやうにいへること
をりくゝ有、いづれもそのつハみと云べきなり、こゝに出たる「おひ」
「いざきみ」の類、可ゝも文ゝも影ゝきを考て知るべし、又俗語ゝ

いへども「ふりみ」「ふゝぎみ」「ふまぎみ」など、ちぐゝて不と云
ふこハつゝもぬゝもいまれざるこおのづゝ明けゝさてついでに
云ふ、此処ニ引る万十二「ひづさち」「ゆるゝ」「云云」の。文
字ハ板の彫り語ならん、方兼コハ引見縱見とかりる縱た、
ゝともよまれぬコハ「ゝ」ぬ字なれど、この分の次ニ「ゝ」引而不
縱、又十一巻廿六引見絶見云云などいづれも「ゆるべ」とこそよむべきに
准ふるにいと考ふゝ、

㊀此ゝうへ今一つ、○一つのみ「ゝ」ゝきて「かゝて」布も浦のゝるめも
いゝまる「ゝ」こやせをゝるゝあまれゝ「ゝ」などのみハ「ゝ」と
いへるに似てゝ「無」を浪にけゝるのゝなれバ、おのづゝ

別ヨリ一の例ども出さぐ、きう、伴のうゝとハ定家々の
こそ建保哥合のなり、

○上

△「ゐがそさよ」「されぞよ」又「あやれよ」などハ、或ハ呼出さよ、或ハ歎息のゐのよ、と出るに限るなどなり、さて「ぬよ」「たりふよ」とハ歎息のよなるを、これハ連辭云につく語なり、その連躰云を截断云ゝて云ゝ切ハその歎息の夢函なと出るなり、上の廿六丁縁分にてさるなり、さるハこゝに引ゝていたゞ云ゝ人のをゝぬよ」を、きろ〳〵詞ゝていへバ、伊勢物語ホ「いとあるれなるくそ云し糸ハをゝぬるを」此ホ上に井五右ヨリ引り、さるる如きこれなりとまづハ思さ侯、上廿四丁左のなりに云へる如く、さべて歎息の夢によとなりとなりて、云ゝ切ゝこ

となれど、なハきろ〳〵こゝバにつきよハつゞく詞につく、繋りきなを繋りしよ「ふりをりをるよ」「ふりをるよ」「ふしよ」をつゞきよ〳〵云ふべきたゞひゝまづハ大判に云ゝうべし、さて万葉集「んな人よ」ともにいるハ、んハ截断連用の両をかめる故なり、「ふなれぞよ」「ぞなを」「ぞよ」なども、両ゝもいるハ、ぞふのふも截断連躰の両をかゝたれバなり、かゝうゝとゝるぞまづ格例の差別なるされど狂考をバ連弁とハたゝ〳〵ぞゝおがしきぞに、よゝもおいもそへ云へる例なり、ぞハ截断云なれバ、ぞるハゆゝたれど、よゝ云んハぞをぬゝと摂じて、ふ「云の夢」の云の如く、人のをゝぬよゝ云ゝにこそゝ忘るれゝ、先のゝハいうなれバこゝ、われぞるゝ〳〵み

ぞよなどいへる例も皆こなり、又仰まる詞こそくて、「ぬまへ」と
やうに云へることゝハ、中昔よりハをさ〳〵なく、よゝ必云やうなり
こたり、かくさはふこまうにさぶむべきこゝ狂ひれど、大うるを云えん
にハ、おゝよゝハ用く歎息なるを、截る詞こハおゝといひ、連くこゝ
よゝそふることゝ云えおうんこゝやまちハなるべし、狂云ぐよま
とハ云へどおよゝハいまぬハ、よハでく詞ふつきおハきるこにつけバ
ぞと知るべし、「ふるるおよなどの和ハ分のき　但し去ぬ世すあつるを
おりおのひ紛ふるこゝるうん」
きあめこびこきハ刃をつそぐふくのちゝめよ」などハ、ぬハでく言
なれどのふかりてハ已にきるゝ云ゝなれるを、狂よゝ文るハ
いうにゝいをへうそれハのハぞやふ伝ふたぐくるなぐ〳〵、ぞやふよりハ

やかろく、むを地に近きこゝもあるこをりくいへるかくこそ、こく
らものこハ應ぐたれどぬハ、のでくかこそ、それをよゝ云よ
歎息のきこそうけこるりのこ初るべし、でく云にかぎれるをバ
よこうけこるぐいこあるきハ、順集ふ「芳野川そこのいもなこい
むてのみこうこやむこをいもぞおりよ　立居こうふる」「おりよ」の方こそハ連歌に
限らぬなれど、惑ふるハ連くに限るなり、

○ゑ中よ云云

△爰ふ十三のよを出せる中に「ゑ中よ」「玉のをよ」「ぐ〳〵よ」の三つハ、呼出
しのよこ云べく、「なぎうぞよ」「おわこずよ」「おまぞよ」「うこみぞよ」「去のぞ
よ」「わそれぐよ」の六つハ、歎息のこ云べくこまるおよ「去こ」「へよ」「りこそ

よち〳〵ばるよの四つハ、希求言を狂つよくもるよなど〳〵云べし、廿三つ云ひりてゆけハ行もも皆歎息のてゐ小、さ斗ゝ異もいく〳〵ざめれと、右乃ぬ分ちもえべきなり、但し〳〵へよの一ゝ彼四段の活言の方四音ヨよを添しあり次卅七丁ヨ云ん延き考へ合べし、

○よるる

△爰に引る拾三・狭衣・同・の三首のよるに二つの別ありり、拾三のおいてるる[よるる]ハ、たゞ歎息なり、廿よるる、今世俗言ヨもいり、詠〳〵云なる浦木のに、いでその時の浦木ハ梅樹松ホて有〳〵[よるる]と云へるゞ如〳〵[よるる]又るる[よるる]ゞ行れも連辨云なるをよるるとうるなり、さてかるを発[よるる]きせ[よるる]と狭衣ヨ云えたるなども、よハ希求の云、それヨるる歎きをそくて、希求をふくせるなり、但し歎息

も希求も云ひりてゆけバ同[よる]とるもおつめれど、おいてるる[よる]などをうち任せて希求とハ云べ〳〵ぬおもむきあゞ、よく毋ふべきヨゝぞ、さてついでヨ云ん、かく希求のよに歎息のををつけてよるる[よる]と云へるハ雅語なれど、同ゞ歎息の多有〳〵、やをつけてよやと云ハ、正き奇文ヨハミえゞ、漢籍読に、懇哉、務学也、欽哉、などを、つとめよやと訓ミなゝへるにひうれて、今ハなどにそれを用ゐることと勿も、漢籍読のヨ、古語によく契ふとにゝめと等のヨ山口菜下巻ホホのく いつりなる序妻くハ和読語路撮ホ詳ヨ、さハ孫ヨ要ゐるテニハ八補めぞうし、

○ば孫ハ云云　ヨ孫も孫よ云〳〵ゞよくと行〳〵

△れて下知の詞ホよりゞそるるよハ、詞のハちまゝ上光九もなふ説の如く、古くハ下二段の活きヨもよりゞそくざり〳〵例ゐるを万葉に

のもろ〻等（ドモ）より古今・源氏・わくらゝの正記を考るに、先ハ其よりゞ活、
ざるハ四段の用き、そへゝるハ下二段の活ゝ大ゝ別まこと、但し源氏より古く
も字津保などゝ
段活の者四音ゝよを活ゝるなり又源氏にもをゝ〳〵ハあきゝなりゝ然るゆ後ゝハ復彼四段の活といへる語等（ドモ）の者四
音にもよりゞ活ゝるも少ゝらゞなれるとなれバ孫よゝ云てゝのなり
たその類ひと云へバいさゝれぬべゝれど、なほげふよろゝしきことゝハ
きこえぬ、さて又この作もる孫ハもべて連用云を受ゝるを、又一
つ、將然云をゝる孫なり、そハ彩ふ言の孫と云へし、あへ（ハ）も頼
忘のハさゝべて將然云を受るがなりて、仰もるゝハ連用云をゝるゝ
なんなるゝ一考四十三右のゝり分ふ云へる如し、それと合せ考ふべし、
活雜秘編に負訛なりてみなん
ねのゝつゞゝゝゝたゝ日番四編不、

○やもめ辭の志

△此志げふ云ゝハ下に志と忘ぜ但しそれゝゝ三つの別なり、一ハ將然を受る、
二ハ已然を受るなり、爰に引る哥ゝて云ゝ、古ゝ三ゝまてといふふ〳〵いりまゝ
ゝ「義家乃「ぬくゝゝ」「同九「おゝ志おゝゝ」同十「去慶」共六首なる八將
然云ゝ受るゝへかゝもる志ゝ、其外の十一ゝ受る志ゝ皆已然云を受たゝ
ゝへ掛もゝ、此將然云をゝ義て忘ぜる志ハ、ゝゝといふ志味あり、已然云
をゝと受て忘ぜる志ゝ、字音生物を嫌ゝ云定る類なり、考べし

○「らゝ」

△司ゝこゝの條なれゝ、「おいらゝ」ハ、老と云ゝゝたゝらゝと云ふゝとの
そハもるなゝり、おいのゝいハ連用云なれバ然云ふも云ひなゝ格なり、
又ゝふらゝハ、そのおいらゝの例なゝバゝぴらゝと省べきゝ、ぷりゞ

ハ截断言なるを交てこそぶらくと云へり、さてこそ、ぶらくハ又かもりて、又ハ連用云なれバおいらくの例ともきこゆるやうなれど、おいハる乃延なりたるともいはるべし、まさ〳〵ろをのべてらくといへるならんとおもふ、ろくハ、万十、天川ゑとよめるけぬらくと云へるまぐ、かくまバ老ハおゆるとをいへ、おいるとハさ〳〵にいたざれバ、たいうくをおいるの延ハまゆるとハきハめて云ふべう〳〵ざる、それとハうはつゑ乃り、さて又おいらくのこぶらくのとのろてふをけ〳〵てうけられバ、炊らくハ用の語ゑハいらじ〳〵も思ふる、但〳〵これゑ分ハ山口栞を又ゑがめて、ゑらくハりとおぬらくあるゑを、万葉をあやまりよりて、おいらくと云へるがハびろて、古今などゑハおいらくといふあれどみをひがゝなり、惑らくさぬらくなどこゝろしく円例なるをゑと云へる八皆りゝきけど直ふ今一きばゝくハしき歌を世んまぐハ、さゆゝこゝてをいまぐゑ服〳〵ゆゝぬゝ、思なる心のおそきゝゑ、又思ふに、らくハ、めゝらゝのはき、連用云なるかゝに、らくといへるハ例の躰云のさゑゑ云ひ

なせるゆゑ、のゝも受るにやはらん、覚束なけなる語なれど、山口栞ト栞かるこれが一條を考て、猶よく正を人もがゝとぞ祈ぐ〳〵、

○まく

△これハまゝの活きなるよう〳〵、土一巻四十五右のろ分等ゆも云ひ、略図ゑ必〳〵てそれ受る辞をも示〳〵つ、又七巻卅八ろり分ろ安ゆのゝ〳〵いべきなり、万十一、今ゑゆも同ゑろりめそあゑみだてゑん年月久〳〵けまくに、又同二十、あもそどゝ玉にもがもやいくでゑてゝうづられ中にあへまかまくも〳〵宵などハ、まくを延躰云ゝうくるに、截断言受るもゝてうけゝられど、なほらぐくの辞〳〵その校七巻卅八又て考べし、炊ハ、ゑまくゝ比ゝやゝきなど、うれ用云を孫のやうに云ひなれまくゝとハ同じかゝぐ〳〵けん、あへまくむゝ云をのぐ〳〵るゝやゝまさハ炊もなほらくのれゑ

ぐひこや、万十九廿足日木之山云云公之越麻久、これ〳〵
八ぜ表年を麻久と云るならん、ぞ思ふ、

○こゝにぞ云云又　きく　のほ〳〵きと云ゐ〳〵べの〳〵ぬけてかやう
にのゝじを用てをいつり。

△この解釈ハたゞくり、まくの、ハ、たえんの、ゐなど云へるゝ同例ゝて、
連用云を非云ホ云ひなゝて、のゝとうけゝるにもゐれ、さゞ文字のたゝ
ぬ故ゝとそのゝこハゐらぢ、略図を按じ、諸活用云の連用のゝとゝろハ、何
ゝても、のゝと受らるゝおゝ〳〵ゝうゝての例格なるゝを知べし、但しそれ
ゞこれゝの例証などハ、活語指南を披きて明らむべし、

○ゝえき集　星よきてまゞもゐるおんほゝぎゝ〳〵ゐ紀るもつゝへ　ま　をかし

△奴奇左の註ホこれハ云云りゝハくの誤りゝこハゐ〳〵ざるゝや、と云へるゞけ

ホいたれゝるやうなれど、さてもなほゝちよゝハきこえ難きうゝ
とおもゝる、いたんやうゝへまゝをかゝ、を添うりぺゝと考ゞゝし、ゝ
初めにいへるかゝハいゝゞ考えんがゝゝぞおもハるゝ抑この分よ、かの正保四
年の鏤板の秘仙家集ゝハ然ゝえたれど、こハ彼校本ゝて考ふれぞ、
「星よゞざで」の句ハ「へ、ちまぞ」、まゝ「つゝへまえかし」ハ、「かゝらえまかし」
の誤りなりゝ〳〵ちまゝをたり、さて包一首の趣よく通るホゐ〳〵ゞ
や、されバ「行まかし」ハ、り〳〵「行まゝかし」の省云ゝそその例多ゝれぞ、
それを又「行まへかし」とえをそへ云へるゝハりゝかきこゝ決め
ぞ云べゝらんかし、

○　きゝ　古八　ゞ年ゐうゝ　きく　ホあきね云云又云云　玉篠　ゝ云云などの

□き〳〵　きゝき□ハ。云云

〈因ふり出ん、古事記傳十九十八云、伎まさ久を古言ふ祁久也云る許と多〳〵　古今集に世の中のうけくこゝおきあゝ云る等ど八字伎にて伎を祁久と云る　ありまく惜けくもあ〳〵等ど云大を〳〵にて久を祁久と云るなり何も也に例わゝし、くいへる八少〳〵いうぐなり、実ふかく云へた「まえ」なれぐなふぞハよき□かるゝやのみぐまてゐまどあ〳〵きくもあ〳〵」など云へるも、いゝやもく、きえらるれどさてハきく〳〵云ゐハ如斯こゝ定らぬなり、山口栞下巻十六ニ云へるこゝゐり、合せ考ふべし、抑こゝに引る四首に、きく〳〵と云〳〵立つゝえたる中に、古十九の、あ〳〵き□く」後三の、をし□き〳〵」大和物語の、なゞきく」ハ、なゞく。をゝく。あ〳〵。」なり〳〵だすいへバきゝなゝちきゝ、古十九の、よき□く〳〵ハ、なふぞハ□の弦なめれだ

よ。きゝなり〳〵粮けバそれもよく通るなり、又古十八の、うき□」ハ殊に、う。ふ。」ふなり〳〵ふ〳〵と文れど云て有べきなり、然ハゐれど此類多く、粮き□く」のゞき□きゝなどをバ、のゞき。ゐづく。〳〵ハうつても云ひがゝきなど亦思ふべきゝなり、如此もバ□く〳〵標〳〵たる処ふ出せるなれバ〳〵て、たゞひゝつこのゝおゝこハ看るまゝきなり、れて書よむこハかゝる心用ゐるゝなり、たゞし使まさ久を祁久を云〳〵ハいつれど、を□をきゝ又く。と云〳〵ハ云ハぬなり〳〵云て有べきゝ狂考ふべし、

○か〳〵□ハ切まてゐる辞の下に係るあ〳〵むく。云云

△げふ志ゐなれど今少し初学のためにとなゝバ、かゝ□ハ截る〳〵辞の下に係るあゝむ〳〵さるハくさ〳〵ゝ〳〵く詞どもきる〳〵処ゝゐり〳〵も、又て ふをゝの截るゝこゝむの下にも、又希求の辞の下にも、係るゝこゝむ

なり」といもぢよろ〳〵からん、爰に引る奇ごもにていもく〻つせゑん。かゝ・つゝまて毛けも。かゝ・なゝ。なゝハ、活く詞どものきる〳〵処ふそへなるなり、かゝるぞ。かゝ・なゝ。なゝハてふをゝの截るにそへゝるるり、〻てをえよ。かゝ・〻のゝべ。かゝ・なゝハ希求の詞ふ係るなり、

ゝ九九
四十右

ゝ名ゝ。かゝ・も同例なり、

○ゝへ。かゝ・ゝを云かくのおゝ〳〵下へゝをふへてをいつり。云云

△炊ゝを係るハ、頼ゝ意の詞の下なるかゝに係へるぞ多き、うれどまれゝハ希求の云につけゝるかゝの外ふ、共いもゆる截断云につけゝるかゝのもゝ下にゝをゝいつるゝもゆり、大殿序に〻れのれも故大政のれゝ〻負伝公の云云ぬゝハ其御時云云かゝゝるのようきゝ〳〵

ぞいひ侍りゝかゝゝを」ゝゝゝゝゝるなゝを考ふべし、右ふ挙なる〻へ。かゝ・ゝをいくゝをふゝじ爰の才を云云〻へ。かゝ・ゝをかゝゝしく爰のようゝをふ云云などのかゝゝをも、炊云云ゝぞいひ侍りしかゝゝを

も、それゝかゝりハなゝれど、その〻ゝのかゝゝを」の上なる詞の希求云なるハ、づれめづゝしかゝぬゝゝなるを、右大殿序の如くに、截断言をもゝてかゝゝをゝ云へるハ、なふゝなくゝ発づゝかふ性ゆるに引ゝばや、ゆり

ふハ連続言なれゝど止なるぞに引れて截断云ゝ特もるゝ三丁の深分れかし、斯て考ふふへ補条ゝ考ゝ乱源き会話経考かゝるそもおふつゝ考ゝぞるゝゝれぬかし」ハゝるゝゝゝ字誤脱あるべし

㊀かゝゝハもゝて諸活用言の截断言一切ふつくゝなり、略図をゝそ結ゝ

曉ゝせよ。〻ありきかゝ」ゝ云ふゝべきを、〻ありゝかゝ」ゝ云やうの誤ゝ、

近き世の人ゝハまゝゝえや、

漏やしおかえそ元補集を更に披見、その校合ハ件の「年
源き」の奇、「くさ源き谷の朝夏うりてむおほつゝちくれ
ぬ」しゝ、初三四五の四句落かたれり、さてその詞うき、
「左大将のひえへのありてかへりぬ」ちゝ
くはゝ、さりしゝハおぼつゝなきよゝ乃年代返し「小」と有、
傍に記せるハこれもかの猪苗代本の校合なり、かゝかくにおほ
つゝちくぞゝゝれぬかしとて小をはたづねる奇のゆりしに
てハなきさなり、詞書より一首のきべてをよく考へべし、（古異校「ゝそ最」
明ありゝハいまぐゝえさゝねど、印本ゝのゝよりて「そゝいへまを下のぬりしひが
ごとなりとゝぶめのゝえもまづきをあとハちりぬよきくなる考へてよ、

玉緒繰分乎巻